

ピアニスツ

イン・ニューヨーク

神沼遼太郎

アシュケナージ、アックス、アルヘリッチ、内田光子、キーシン、グティエレス、クリーン、シフ、P.ゼルキン、仲道郁代、バレンボイム、フィルクスニー、ポリーニ、ラローチャ、ルプー、ワイルド、ワッツ、NYに来て8ヶ月弱の間に聞いた主なピアニストである。

一口に「聞いた」と言ってもいろんなパターンがあって、例えばキーシンとバレンボイムは協奏曲の夕べとリサイタルの両方を聞いたし、アックスは室内楽と協奏曲。アシュケナージに至っては、リサイタルに室内楽にオーケストラの指揮というバラエティ。

各人それぞれ持ち味があって、とても1度書き切れないのだが、今思い出しても震えがくるのは小沢+ボストンとカーネギーホールで共演したアルヘリッチ。プロコフィエフの3番の協奏曲を弾いたのだが、驚いたのはあの情熱ほとばしる演奏の間、チラと指揮者を見る時以外彼女の頭が全く動かないことだった。素人が技術面の話をする無礼をお許しいただければ、彼女は身体とピアノとの距離を一定に保ち、鍵盤から手までの高さだけで音量を調節するという実に理にかなった奏法を取っているながら、その指先に内面のエネルギーの全てを集中させる。あの熱い演奏がこんな静かな弾きぶりから生まれるとはねえ。

神童キーシンはショパンの協奏曲2曲（メータ+ニューヨークフィルとの共演）とカーネギーでのリサイタルを聞く。リストも苦も

なく弾いてのけるテクニックを持ちながら、バリバリ弾くというソ連型天才特有の性癖？が全く見られず、中庸とか平衡の感覚を既に体得している。それこそ彼の非凡さではなからうか。

つい先頃亡くなったクリーンのおそらく最後に近いモーツァルト（K459の協奏曲）を昨年8月エイヴリー・フィッシャーホールで聞き、単に音が美しいだけでなく気品が客席に薫る感じがした一方、ラローチャはK488の協奏曲で「モーツァルトぐらいでじばたするんじゃないありません！」と言わんばかりの風格を見せた。1991年にこんなモーツァルトを何回聞けるか、楽しみでもあり不安でもある。

大活躍のアシュケナージ、僕にとっては久方振りだったが、リサイタルで弾いた「ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ」及びパールマン・ハレルと共演したピアノ・トリオ全曲、いずれもブラームスにとりわけ魅了された。どこまでも深く響く低音、正に玉のようどころがる高音のピアノシモ、CDで聞くほど明確ではないが、彼にしか出せない音が随所に出てくる。それがブラームスの音楽によく合い、足元からぬくめられているようないい気分。いつものスタインウェイなのに、何で彼の時だけあんな音が鳴るんだろう？

最近登場した大物はやはりポリーニ。3月9日カーネギーでリサイタル、御承知のとおり今シーズンのカーネギーホールは、創立100周年記念の特別プログラムを組み、2つのキ

ーボード・シリーズもそれに含まれている。しかし、この日のリサイタルはそのシリーズ外のもの。いかにぜいたくなスケジュールかおわかりいただけると思う。

プログラムはオール・ベートーヴェン、7、8番のソナタと「ディアベルリ変奏曲」。僕にとっては5年ぶりの生である。

出だしのフレーズからグイと彼の方に引き寄せられそうな感じ。5年前と同じく、一点の曇りもない音、確かなテクニック、そして何よりも演奏への集中力の凄いこと。僕の周りも彼の只ならぬ気配を感じ取るのか、いつもは行儀の悪いNYの聴衆が殆んど咳一つせず聞き入っている。たかが、と書いては楽聖に失礼だが、初期のソナタなのに31、32番あたりを聞いてるような中味の濃い響き。おかげで前半聞いただけでヘトヘト。

この調子で「ディアベルリ」をやられたら

どうなるだろうと少々気が重かったが、こちらはまだ緊張感が全体に分散されただけ疲れも少なかった。1つとして曖昧な音がなく、彼の響きで染めきっていた。僕としては、昨年聞いたバレンボイムの方が遊びがある上ロマンチズムが前面に出ているので楽しめたが、これはこれで何とも文句のつけようがない。改めて実力を見せつけられた思い。

カーネギーホールはこれから5月5日の100周年記念ガラコンサートへ向けて、ピアノに限らず豪華プログラムが目白押しである。リンカーンセンターでもアリス・タリー・ホール（小ホール）での内山光子モーツァルト・ピアノソナタ・チクルスが始まったばかりだし、エイヴリー・フィッシャーにも続々名手が登場する。これから当分ニュー Yorker を湧かせるピアニスト達の活躍ぶりをお伝えしていくこととしたい。



MAURIZIO POLLINI
PIANIST

Columbia Artists Management Inc.
165 West 57th St., N.Y. N.Y. 10019

PG21932A